

浄

monthly
JÔDO

土

Jun 2008

法然上人讃仰会



行は一念十念なほ
空しからずと信じて
無間に修すべし



(小消息)

鬼海弘雄『浄土』2008年年間表紙写真の人

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工員、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年、『India』みすず書房1992年、『や・ち
また：王たちの回廊』みすず書房1996年、『東京迷路』小学館1999年、『印度や月山』
白水社1999年、『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年、『Persona』草
思社2003年、『べるそな』草思社2005年、『In-between8 鬼海弘雄 ポルトガル、マル
タ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年、『東京夢譚』草思社2007年、『集合住
宅物語』みすず書房2004年（撮影・鬼海弘雄 文：植田実）、『メッセージ』樹立社
2006年（撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ）

浄土

2008/6月号 目次

法然上人の人間観.....	丸山博正	2
仏教コラム	大室了皓	9
都市開教の現場から	藤井正史	10
会いたい人 坂東三津五郎さん②	関 容子	14
江戸を歩く 第十七回	森 清鑑	22
響流十方	小村正孝	30
法然上人とその時代 壇の浦へ 第八回.....	石丸晶子	34
Jフォーラム		43
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人の
人間観

大正大学名誉教授
浄土宗勸学

丸山博正

一、浄土教祖師たちの人間観と本願観

長年大正大学で浄土学を担当していたので法然上人の人間観についても何回触れたであろうか。法然上人だけではなく浄土教の祖師の教義を話すときは、その人間観は重要である。その祖師の人間観が本願観と結びついているからである。法然上人が『選択集』で挙げた浄土五祖、とくに曇鸞、道綽・善導大師をみると、人間の不完全性を見つめてその不完全な人間のために阿弥陀仏の本願があるという系譜といえよう。

1、曇鸞大師（六世紀）は『往生論註』の冒頭で当時の世を「五濁の世・無仏の時」としている。五濁とはこの世が墮落するときの悪い現象を五つあげたもので人間が悪くなり世が乱れることをいう。無仏とは釈尊が入滅し次の仏（弥勒）がまだこの世に出現しない無仏時代をいう。曇鸞大師は自己の生きている世をこのように見つめ、また自力で退転せず悟りを求めるのを「難」とした。それではどうしたら悟りを求められるのか。すなわち「信仏の因縁をもつて浄土に生ぜんと願すれば、仏の願力に乗じて、すなわち、かの清浄の土に往生することを得。仏力住持して、すなわち大乘正定の聚に入る。正定はすなわちこれ阿毘跋致なり」と主張するのである。ちよつと煩瑣になったが、要するに阿弥陀仏の本願力（他力）によって浄土に往生できる。往生すればさらに本願力によって、大乘仏教の悟りに進み退転しない位（阿毘跋致）に入り、悟りに至るといふもので、人間の悟りへの不完全性を認識し、その不完全な人間のために本願があるという構成による往生浄土の思想が打出されたのである。

2、道綽大師（七世紀）は法然上人が『選択集』第一章で引用しているので知られてい

る。「安樂集」の著者である。すなわち聖道門と浄土門を挙げ、自力聖道門については「今の時証し難し」として、その理由は「大聖を去ること遙遠」と「理は深く解は微」の二点としている。第一は「無仏」であり第二は人間側の仏教理解の低下である。そしてさらに「当今は末法、現にこれ五濁惡世なり」と指摘している。つまり曇鸞大師を一步進めて「末法」を追加したのである。仏滅後、正法・像法を過ぎて末法時代に入ると仏法は形骸化する。これが末法である。道綽大師は自己の時代をそのように見る。こうして道綽大師は自力で悟る仏教は絶望的だとする。したがって「ただ浄土の一門のみあつて通入すべき路なり」とし、「無量寿經」の第十八願の文を「たとひ一生惡を造るとも、命終の時に臨んで、十念相續して我が名字を称せんに、もし生ぜずば正覺を取らじ」と読み直しているのである。末法の世になったのであるから「一生造惡」の者も本願の救いの対象となるのである。

3、善導大師（七世紀）の人間觀はまず『觀無量壽經』の上品上生から下品下生までの九品の往生人をすべて凡夫とするところに現れている。その人の環境・因縁によつて九つのランクが經典に示されているが、いずれも凡夫の中の九ランクですべて凡夫とみるのである。（『觀經疏』）。このようにして人間とは凡夫であり、自力では悟りへ至ることができないことになる。

善導大師は至誠心・深心・廻向発願心という念仏者の心構え、三心の中の深心について、二つの大切な確認をしている。その第一は自分自身の人間存在の自覺である。人間觀である。あまりにも有名であり、法然上人も大切にしておられる。

自身は現にこれ罪惡生死の凡夫なり。曠劫よりこの方、常に没し、常に流轉して出離

の縁あることなし

第二は本願観である。

かの阿弥陀仏四十八願をもて、衆生を摂受したまう。疑いなく慮いなく、かの願力に乗じて定んで往生を得。

かくして四十八願の第十八願に説かれる念仏によつて、いかなる人も往生できる。そして釈迦も諸仏も浄土の教えを勧めているというのである。

二、法然上人の人間観（三学非器）

法然上人当時の仏教界は当然のことながら南都仏教と天台宗・真言宗が大きな勢力を有し、学問においても天台宗や真言宗が中心となり「この世界の人々は、実は最初からさつていて」という内容の教義体系を構築し、貴族社会と密接な関係を保ちつつ教団を拡大していた。こうした中で法然上人は十代半ばから四十代前半までを比叡山で過ごし、比叡山で「智慧第一の法然房」と評されていた上人は、天台をはじめ八宗の教義に精通すればするほど、その教義の実践の困難さを痛感した。次に述べるのが、有名な三学非器の自覚の文である。これは法然上人が直弟子の聖光上人（浄土宗第二祖）に若いころの思い出として語ったもので、聖光上人著の『微選択集』の上巻に記載されている。

おおよそ仏教おおしといえども、所詮は戒定慧の三学にすぎず。……しかるに、わがこの身は戒行において、一戒をもたもたず。禪定において一もこれをえず。智慧においては、断惑証果の正智をえず。しかるに戒行の人師釈していわく、尸羅清浄ならず

んば三昧現前せずと、云々。また凡夫の心は物にしたがいてうつりやすきこと、たとえば猿猴のごとし。まことにもつて散乱動じやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智なによりてかおこすことをえん。もしそれ無漏の智剣なくんば、いかんがまさに悪業煩惱の縄をたたんや。悪業煩惱の縄をたたざれば、なんぞ生死繫縛の身を解脱することえんや。かなしきかな、かなしきかな。いかがせん、いかがせん。ここに予がときはすでに戒定慧三学の器にあらず。この三学のほかに、わが心に相応する法門ありや。この身に堪能なる修行ありや。〔徹選択集〕上〔原漢文〕

法然上人は戒・定・慧の第一の戒について「一戒もたもたず」と告白する。

この法然上人が善導大師の書によって念仏に仏教の帰結を見出すのである。それについては、いろいろと述べるべきであらうが、ここでは省略して求道の結果、たどりついた法然上人の人間観を挙げておく。

三、法然上人の人間観（阿弥陀仏の前の自己）

三学非器の自己告白は仏道の実践についての絶望という自己といえよう。今、阿弥陀仏の前の自己とは、先にあげた善導大師の深心釈である。そして法然上人が阿弥陀仏の前に立ったときの心構えである。何故ならば法然上人は『選択集』第八章で三心を取り上げ、その解釈は善導大師に依っている。つまり、善導大師の三心釈が法然上人の三心釈としても過言ではない。つまり法然上人の人間観は二通りあると言える。第一は「三学非器」の自分であり、第二は善導大師の文によって「浄土開宗」に至った自分である。阿弥陀仏の

前の自分であり、この第二の自分が当然のことながら念仏者としての自分である。

四、法然上人の人間一般についての人間観

法然上人が自己についてどのように見ていたかについて述べた。それでは人間一般について法然上人が語ったものにどのようなものがあるのだろうか。ここに「明遍僧都との問答」という問答がある。もちろん法然上人と明遍僧都の問答である。「昭和重修法然上人全集」には三種類が載っている。わずらわしいので細部は略すが、高野の念仏者として名高い明遍が法然上人に念仏についてたずねるには「末代悪世の我らのような凡夫はどのようにして生死を離れたらよいか」と問う。法然上人は「南無阿弥陀仏と申して極楽を期するばかりである」旨を答える。明遍僧都は「念仏のとき心が散乱し妄念がおこるのをどうするか」と問う。法然上人は「心が散っても、名を称すれば仏願力に乗じて往生できる」と答える。明遍僧都は「それが聞きたかったのだ」と言ってさっさと帰っていったというのが大体の筋である。「和語燈録」五がもつとも詳しい。明遍僧都が帰ったあと、法然上人は「欲界散地に生まれたものはみな散心がある。それは人間界に生まれたものが目鼻があるようなものだ。散心ながら念仏申すものが往生できるからこそ、めでたき本願なのだ。明遍僧都が心の散るのをどうしたらよいのかと不審がるのはおかしいことだ」というようなことを言ったという。これなどは法然上人が人間とは散心のあるものだ、という人間一般について述べた好例ではあるまいか。そして「散心ながら念仏申すものが往生できるからこそめでたき本願なのだ」と結びついているのである。

今まで述べてきたように、人はみな凡夫であるというのが、いろいろな角度から見た法然上人の人間観と言えよう。そして、その凡夫が、凡夫なりにひたむきに念仏すれば往生できるのが本願なのである。おのおのの祖師たちの人間観にもとづいて本願観が形成されるのも当然といえよう。

さて『選択集』第三章には法蔵菩薩ほうぞうが第十八願にただひとえに念仏を以て本願となされた理由を設問している。その答えが有名な勝劣と難易の義である。その難易の義の中で「もしそれ造像起塔をもつて、本願としたまはば、貧窮困乏の類は定んで往生の望を絶たん。しかるに富貴の者は少く、貧賤の者は甚だ多し」にはじまる箇所がある。続いて「智慧高才」と「愚鈍下智」、「多聞多見」と「少聞少見」、「破戒無戒」と「持戒」とを挙げて「まさに知るべし、上の諸行等をもつて本願としたまはば、往生を得る者は少く、往生せざる者は多からん」として、

しかればすなはち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せんがため、造像起塔等の諸行を以て往生の本願としたまはず、ただ称名念仏の一行をもつて、その本願としたまへるなり。

と熱意をこめて述べておられる。「平等の慈悲」「普く一切を撰せん」とは阿弥陀仏の万人救済の聖意である。そして、父も母もすべて万人救済を求めた法然上人の熱意と一致したのである。上人の人間観につけ加えねばならないとすれば、これであろう。すなわち人はみな凡夫である。そして人はみな救われるべき存在である。

名誉門主御遷化



故名譽知恩院門主中村康隆大僧正を偲ぶ

真野龍海

大僧正には「浄土」題字の揮毫をはじめ、多大の御厚意と御指導とを頂きました。本会草創に挺身された、御尊父、御師匠中村辨康上人のお志を次がれた事でもあります。

名誉門主中村康隆大僧正（名誉門跡・総本山知恩院第八十六世大本山増上寺第八十五世）が、5月8日午前10時45分御遷化されました。

世寿103歳（明治39年4月28日生 満102歳）

「式蓮社大僧正心譽上人念阿浄業康隆大和尚」

「表葬」平成20年6月11日（水）午後1時より

総本山知恩院御影堂

昭和五十年、大正大学学長御就任、私に事務局長にとの御下命。当時は学内紛争ゲバ騒ぎに終始していた頃。お徳でこの苦難は屏息。大学は校地獲得、定員倍增へと展開しました。増上寺法主から、知恩院門跡へと就任されてからも、愚生、お跡を慕うように、浄土宗、知恩院の諸会合で上洛毎にお目にかかれまして。後には、御繁多を考え、手紙を付した、花籠を内侍の方に託してくる事にしました。作夏は、御自坊に届けたのが最後でございました。

乞い願う、「浄土」発展にご加護を。合掌

都市開教

の現場から

藤井正史

国内開教使
月影寺住職

新寺建立という途方もない活動を始めて既に三年になる。ましてや開教地域は、現在活動する国内開教使のなかでも際立って地価の高い場所である。まさに「身の程知らず」な話なのだが、いざ始めてみれば予想とは違う手ごたえがあった。

毎月第二土曜日、六畳ばかりの仏間にて「お念仏と法話の会」を行っている。寺院らしい佇まいであるはずもない、一般家庭を寺と呼んだところで人が集まるのだろうか。そんなことが心に浮かびつつも「誰も来なければ一人で念仏していればよい」と決意して始めた会である。お蔭さまで今では毎回八人から十人の信徒さんが集まり、既にこの広さでは無理を感じ始めている。参加のきっかけは、ウェブサイト、口コミ、他の場所での法話を聞いてなど。誰しも忙しい日々のなか毎月来ていただいているという縁は、相当強いものだと感じている。

念願かない浄土宗から寺院認証を受けた頃、宗門の先輩や友人に活動状況を聞かれると、この会のことを話していた。反応ははっきりと二つに分かれた。「寺らしい莊嚴もないところに、毎月よく集まるな」と肯定的に受けとめてくれるか、「数人しか集まらない会なんて、なぜやってるんだ」と皮肉な笑いを浮かべるかのどちらかだった。

一人でも来ていただけの限り、毎月同じ場所と同じ時間にお念仏と法話を続けることが、開教活動の重要な柱であると私は思う。祖父が自坊を手放し、師父は寺を継がず学僧に専念したため、得度以来、私には根を張って踏んばる場所がなかった。しかし、誰しも自分なりの場を得てこそ真に生きることができるのだろう。開教使となつて、僧侶として進むべき道がようやく見えてきた。

大学院生の頃、在家出身で信州の名刹へ養子に入った先輩と、五重相伝会の準備で毎日

のように顔を合わせていたことがある。とりとめのない話の続きだったか、ふと「僕は坊さんしかできないから」と言われた。何もわからない私は、まだ三十代なのになんて夢のないことを口にするのだろうと、浅はかにも思った。既に道を見定めた先輩の一言を受け取ることができなかったのである。そんな私に「ここ、僕の場所」と笑つて、自坊の近くの小さな喫茶店に連れてゆき、カウンターの上からぶら下がっている回数券を千切つて珈琲をご馳走してくれた。「坊さんしかできない」とは、これこそ自分の進むべき道であるという「仏教の確信」であることと気づいたのは、紆余曲折を経て国内開教使への志望を固めた二十年後のことだった。

「お念仏と法話の会」は仏間で行っているが、通夜・葬儀は斎場か自宅、年回法要なども自宅か霊園で行う。こちらの事情によるものではなく、依頼に応じている結果である。ウエ

ブサイトからの仏事の相談や、他寺からの紹介、石材店、葬儀社、市の外郭団体などからのご縁もあり、現在の檀信徒数は百三十五軒となった。

月影寺の仮住まいは、二つの広大な都立霊園の中間を選んでゐる。多磨霊園まで車で十五分、小平霊園まで二十分の距離にある。都立霊園には礼拝施設がないので年回法要と言つても墓前の回向のみである。驚かれる方も多いだろう。当寺の法務のなかでは自宅での法要よりも割合は多い。また、葬儀で利用する火葬場併設の斎場は車で十五分の場所に二つ、三十分程のところにもう一か所ある。

開教使は通夜や葬儀、法事でも、初めて会ったその日に法要を行い、状況に応じて法話をしなければならぬ。短い時間で遺族の気持ちにくみとり、信頼関係を築くことが必要だ。肝に銘じていることが一つある。

まだ加行を終えてはやほやの二十代、初め

て枕経に行った時のことだった。副住職の叔父から「闘病生活も長かったから、家族は覚悟ができてゐるだろう」と聞いたが、少々緊張気味に檀徒の自宅へ向かった。話しているうちはみな平静さを保っていたが、持参した木魚を打ち、お念仏を始めると、「お父さん！どうして死んじゃったの」と泣き叫び、家族のほとんどが遺体にすがりついてしまった。みな落ち着いてお念仏を称え始めるまで、私はひたすら一人でお念仏を続けるだけだった。一人前の和尚ならば、もう少しきちんと言葉をかけられたのではないだろうか。自分の情けなさを思い知らされた夜だった。

後日、数人の住職方が集っていた席で話してみると、法類の住職から「よくやったな」と声をかけられた。はじめはからかわれているのかと思つたが、「おそらく遺族はお念仏が始まるまで泣くことさえできなかった。それが君のお念仏を聞いて、ようやく泣いてもいいことに気づいた。一緒にお念仏したんだ

ろう。それでいい」と言ってくれた。

私はこの時のお念仏を忘れない。たとえ甲の席で初めて会い、故人を知らないとしても、遺族に寄り添い、家族を失った悲しみや怒りで一杯になっている心が少しでも死を受け入れることに向かうよう、傍でお念仏を称える。これが私の都市開教の基本姿勢である。

今生での寿命を終えるまでに、何とか寺らしきものを、この武蔵野地域に残すことが自分の人生のテーマと考えている。そう言っていると、まだ若いのに大袈裟だと笑われる。しかし、十分活動できる年齢を長めに七十歳代前半迄としても、もう三十年しかない。次に進むべき一歩は境内地の確保である。さらに、本堂、庫裏、宗教法人認証、墓地あるいは納骨堂：まで、まだまだ全て夢の話である。

開教活動には、浄土宗及び東京教区からご支援をいただいている。常任布教師として、さらに今年度は指定布教師としても場を与え

ていただいた。おそらく月影寺が自前の境内地を持たぬまま、私は開教使の任期残り二年を終えることになるだろう。しかし、応援してくださる方々の期待に応えるためにも、仮住まいを脱して新寺建立を実現しなければならぬ。だが無理はしない。白い道を堂々と、いやふらふらとでも真っ直ぐ歩めばいいと思っている。終着点は決まっているのだから。月影寺開山として勧請している、祖父の好きだった歌を最後に記したい。

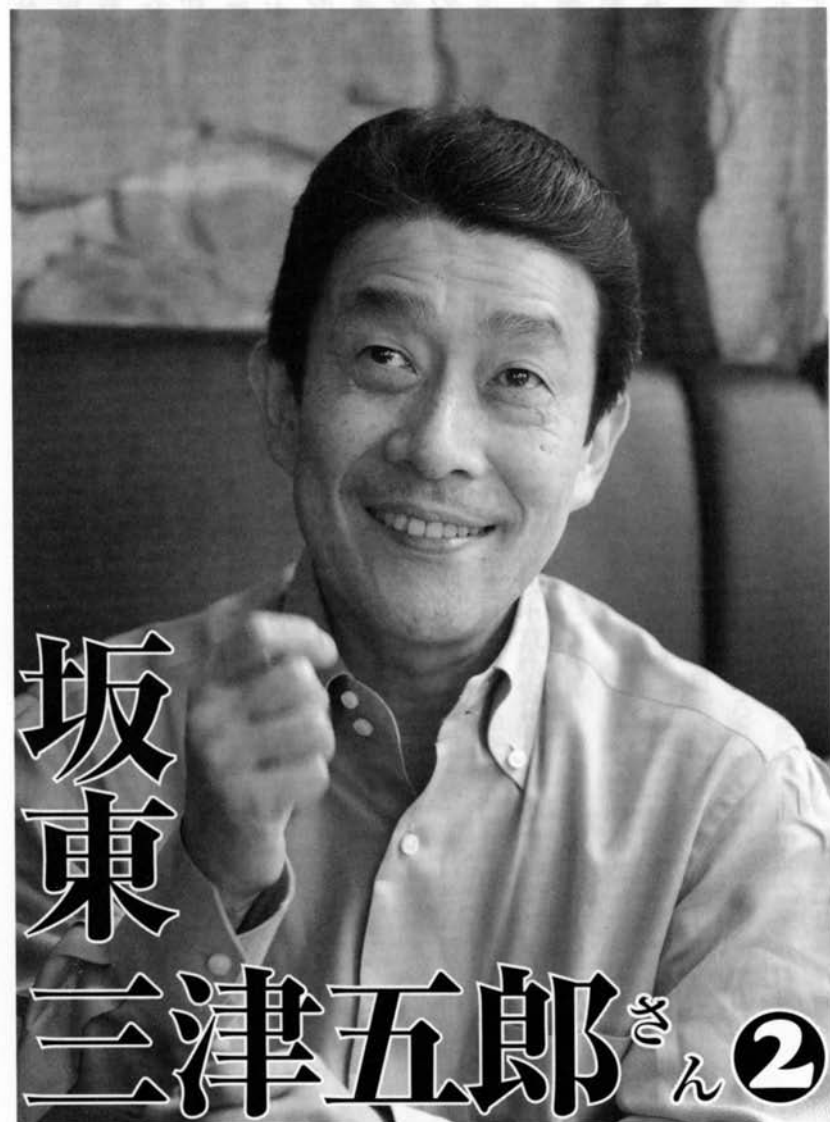
小さきは小さきままに花咲きぬ

野辺の小草の安けさを見よ

高田保馬

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

三津五郎さんに伺って見たかったことの一つに、父方の祖父（先代三津五郎の父である三代目坂東秀調）について、というのがある。永井荷風『腕くらべ』の女主人公の芸者と深い仲になる若い女方のモデル、と言われている人だから、きつと素敵な役者だったに違いない。文献によると、初め長唄の唄方でのちに役者になり、九代目團十郎の門下から二代目秀調に入門。その女婿となって三代目を継いだ、とある。昭和十年、五十四歳で没している。

「三代目秀調という人は女方にしては長身で、すっきりしたいい役者だったようですね。最初は吉住勝太郎といって、とてもいい声だったらしくて、九代目團十郎が『勸進帳』のへひと目の関のやるせなや……という一番の聞かせどころをあいつに歌わせろ、つて、まだ十八、九なのに声が掛かって、それくらい美声だったそうです。それを仲間に嫉まれて、水銀飲まされて声を潰された。昔はたまにそ

んなこともあったんですね。お茶の中に秘かに水銀を入れとく、とかね。それで九代目さんがひどく責任感じて、役者にした人なんです」

そう言えば「田之助^{べに}」で名高い人気女方の三代目沢村田之助も、弱冠十六歳で守田座の立女方となり、やはり嫉みから舞台で釘を踏まされ、脱疽を病んで手足を切断し、その後狂死したという例もある。

「それで、その吉住勝太郎が入門した二代目秀調という方は、九代目團十郎や初代左團次の相手役をつとめる明治の名女方で、いろんなお姫様役の型を残した人なんです。でも二代目には息子がいなくて娘が一人だけ。しかしその娘は父親の芸が全部できて、踊りも踊れて、半ば女役者みたいな人だった。勝太郎はその人と結婚して三代目秀調を継ぐわけですが、結婚はどうもうまくいなくて、別れて、次の奥さんもらって、その人に子供ができないうちによそに子供ができたのが、ぼく



十一代目團十郎が実盛を演じた「実盛物語」。瀬尾を演じる八代目三津五郎と太郎吉を演じる八十助（十代目三津五郎）

の祖母になるわけです（笑）。一説によると祖父たちが夫婦喧嘩して奥さんが出てった隙に二号であるぼくの祖母が乗りこんじやって、本妻さんは帰るに帰れなくなってしまうた。七生崇つてやる、って言つて、憤死したんだそうですけど、ぼくの祖母はピクともしない。強い女性なんですね。祖父と知り合う前に子供が三、四人いて、祖父とつきあつてからまた五人生んでる。すごい生命力。ぼくが子供のころ、しわくちやで小つちやなおばあちゃんでしたけど、まだ生きてましたから。相当な肝つ玉ばあちゃんですよ（笑）

しかしこの三代目秀調が五十五歳で亡くなったとき、三津五郎さんの父はまだ六つだった。

「それで父は六代目菊五郎の部屋子になつて、二人の兄（板東又太郎と十代目市川高麗蔵）と、子役として働いて小さい妹たちのいる一家の家計を支えなきゃならなかった。六代目が亡くなつてからは紀尾井町（二代目尾

上松緑）のおじさんの家で居候になつて……だから大変な苦勞をした人なんですね、父は」

それに比べて母方の家系は花やかだ。

「赤坂に家があつて、離れみたいなとこに曾祖父（七代目三津五郎）と曾祖母が暮してましたけど、これを取り巻く生活というのは明治が凍結されてそのままあるようでしたよ。長火鉢があつて、鉄瓶があつて、キセルに両切のタバコを半分に切つたのを立てて吸つてましたから。よく見かけたのは通つてくる女髪結いの割烹着姿^{かつぼうぎ}。ひいばあちゃんのことばかりの少ない髪を、きちんと結い上げてました。ひいばあちゃんはお小っちゃい人で病氣をしたこともあつて、お風呂桶がまたげなくて、タライで行水使つてましたね。聞いた話では明治の没落士族の娘で、出入りの新富町の頭^{かぶ}（鳶職）の家に養女に行つて、そこから新橋芸者になつたとかで、とても氣位の高い人だったらしい。とにかく江戸三座の守田座、中



左から七代目夫妻、八代目夫妻、九代目夫妻。九代目の膝に抱かれているのが十代目三津五郎

村座、市村座の座元というのは苗字帯刀が許されていて、そのうちだけがみんななら『旦那』『御新造』と呼ばれてた。それ以外はどんな人気役者でも『親方』『おかみさん』でしたからね。ひいばあちゃんからおふくろまで、御新造と呼ばれることにすごいプライドを持ってましたよ

三津五郎さんが『源氏店』の切られ与三郎の名ぜりふ「えー、御新造さんへ、おかみさんへ、いやさお富、久しぶりだなあ……」の例を引いて、これはだんだんと呼び方のランクが下がっていくのだ、と解説してくれた。「このひいばあちゃんに子供ができなかったので、祖父の八代目三津五郎は、養子です。その奥さんも新橋芸者。二代続けて新橋なんです。祖父は役者より学者、といった感じの人で、食道楽でもありましたから、ぼくが小学生のころよくホテルの朝食に連れてつてくれました。それが土、日になると、学校へ行く日よりも早く、ピンポン、と朝七時ごろ

(笑)、玄関まで迎えに来る。せっかく朝寝坊しようと思ってるのに、いい迷惑なの。それで昔のヒルトンとか帝国ホテルとかのコーヒールームで朝御飯たべて、それから本屋に連れてかれて好きな本選べ、つて。百科事典なんかも買ってくれましたね」

三津五郎さんが八十助だった子役のころ、『源平布引滝』『実盛物語』の太郎吉をつとめたときに、斎藤実盛役は十一代目團十郎、孫(太郎吉)に手柄を立てさせるためにわざと討たれる平家方の瀬尾役が実の祖父、八代目三津五郎だった。こういうところが歌舞伎の醍醐味の一つなのだろう。客席はひと際感慨深く、芝居と重なる祖父と孫の共演を、身につまされて眺めたものだ。

「八代目夫人となった人は新橋の売れっ娘で、踊りが上手で、お酌をする暇がないくらいお座敷がかかったそうで、でも祖父と駆落ちして結婚したんですが、この祖母がぼくをすごく可愛がってくれました。自分は男の子

を生めなかったという生涯の負い目があったて、長女がぼくを生んだんでまあほっとしたかもしれません。かなり早くに、ぼくがまだ小学生のころに亡くなりました」

再婚してからは、残念なことに娘の一家とのつきあいが疎遠になり、八代目は昭和五十年、六十八歳で没した。

「ぼくの両親は本当に仲がよかった。あんな仲のいい夫婦というのはなかなか見ませんよ。おふくろのほうが先に惚れたんだけど、親父にはそのころ好きな人がいたらしいの。でも縁があつて、父が二十六、母が二十三で結婚しました。母は踊りの師匠をしていて、二十そこそで自分の会をやるほどの人だったんだけど、結婚を機にスパッとやめて、父を支えるほうに回りました。もし自分が男だったら当然歌舞伎役者になるところを、女だからそれができない。だからぼくに対しては、お前は男で舞台に出られるのに、それをいい

加減なことをしたら許さない、という毅然たる態度でしたね」

では、三津五郎家に養子に入る形の結婚をした父、光伸の立場はどんなだったのだろうか。

「まあ、婿として入って、舅の八代目の祖父とは人間のタイプがまったく違いましたからね。祖父は学者タイプ。父は職人タイプ。本読まないしね。おふくろは中に入ってずいぶん苦労したと思う。一方、紀尾井町のおじさんに対して、三津五郎家の跡取りというような顔を見せると途端に機嫌が悪くなったようですね、結局菊五郎劇団に残って、ずっとその一兵卒でいる、ということしかできなかった。だからおふくろは、ぼくに賭けたと思うのです。お前で三津五郎家を隆盛にしてほしい、という強い思いがあったんだと思う。親父のことは大好きなんだけど、役者として紀尾井町や自分の父親との関係がものすごく難しい。両方からの重圧で、親父はい

つもピリピリしてて、手が早かったですからね」

光伸から養助となり、やがて九代目三津五郎になっても、晴ればれとした日はなかったのだろうか。

「ぼくが子供のころに見てても、親父の役は十年一日のごとく『勸進帳』や『熊谷陣屋』の四天王とか、『魚屋宗五郎』なら三吉、『髪結新三』なら勝奴でしたからね。ぼくはおかげさまで弁慶も熊谷も宗五郎も新三もやらしてもらってますけども、親父は襲名のとときこそ『吃又』とか『喜撰』とか『蘭平物狂』とかの主役をつとめましたけど、あとはほとんど生涯脇で終わりました。しかしたとえ自分は犠牲になっても、息子を守り立ててやろうという優しさがあったと思います」

役者の家の家族関係というものは実に複雑なものだ。とにかく職場が一緒で、何事もガラス張りなのだから。それにしても、今の三津五郎さんが晴れて重役をつとめる舞台は、

父方母方の何代にもわたるさまざまな思いによって支えられている、ということになるのだろう。

「父の晩年の十年しか知らない人は、あんなおだやかな人、つて言うけど、とんでもない。子供のころから親がいなくて、世話になった紀尾井町には長年頭が上がらなかつたし、義理の父の存在がドンと重くのしかかつてましたからね。その八代目の重圧が外され、松緑おじさんが亡くなったあとは、気を遣うことが少なくなつたせいかみるみる円満な人になりましたから」

仲のよい夫婦は亡くなるときも一緒によく言われるが、先代三津五郎夫妻がまさにそれだった。

「父は肝臓がんで三年の命と言われてたけど、母がその八年前に手術した乳がんが急に再発して先に亡くなつたら、その四か月後に父は亡くなりました。ぼくから見ると、父にとつてその四か月すら長かつたんじゃないか

と思いますね。親父が座つてると、その体にボコツと穴があいてるのが見えるようでしたから。その穴は周りの者の言葉じゃ決して埋まらない。何しろ毎日おふくろの名前が親父の口から出ない日はありませんでしたからね」
九代目三津五郎は平成十一年四月一日没。六十九歳だった。

「四月にはぼくが国立劇場で『十六夜清心』^{いざよいせいしん}の通しをやることになって、父は白蓮^{はくれん}で出る予定でした。亡くなるまで枕元に台本置いて、せりふを憶えてました。どうやったって起きられるわけもないのに……。父は口癖のように、俺は役者に向いてない、そんなに芝居は好きじゃないんだ、つて言っていましたけど、最後の病床でのそういう姿を見ると、そうじゃないんだ、やつぱりすごい好きだったんだ、ということがわかつて、父の本当の人生を理解できた気がしました」
(つづく)

第十七回

江戸を歩く

増上寺から江戸城へ



大江戸ウォーカー
森 清鑑

溜池

江戸時代、溜池は景勝の地であった。麴町、鮫ヶ橋、清水谷辺りから湧き出た水が流れ、下り、自然にできた、天然の大池。その長さは、虎御門から赤坂御門まで続く。江戸時代以前は、池の南側は湿地帯で、江戸赤坂田町は埋め立てでできた町である。江戸初期に、紀州和歌山藩、浅野幸長は家康の恩に報いるため、この池を整備し、米国大使館前の榎坂まで堰堤を設け、虎ノ門に堰を造って、ダムとなし、外堀に繋げた。溜池の水は、一六五四年、玉川上水ができるまで、南一帯（赤坂、六本木）に住む人々の飲料水でもあった。溜池沿いに麴町に向かって歩いてみる。

松平大和守屋敷を左に見て（新日鉦ビル）、潮見坂の途中を右に曲がると、左側は佐賀鍋島藩、松平肥前守中屋敷の塀が続く（虎ノ門病院）。それから先はすぐに御堀である。右手に香川丸亀藩、京極佐渡守の上屋敷があり、

道に面して金毘羅様が鎮座している。京極家が讃岐本宮から屋敷内に勧進したものである。江戸時代は金毘羅信仰がさかんになり、京極家は市民の熱烈な要望に応じて毎月十日に、ここを市民に開放することにした。御堀に沿ってさらに進むと、虎御門が見える（桜田通り、虎ノ門交差点より少し霞ヶ関寄り。文部科学省・文化庁の前）。堀橋を渡ると、石垣に囲まれた堅固な門と大番所。虎御門は、江戸城の裏鬼門封じの役割を担い命名され、現代の虎ノ門地名の起源となった。金毘羅様の前は、御堀で、その堀に面して溜池方向に上る坂が葵坂。現代の虎ノ門病院に向かって右の、金刀比羅宮から外堀通りに向かっていた。広重が描く、「虎ノ門外あおい坂」は、失われた、この坂を見事に彷彿とさせている。夜三日月の葵坂。裸で提灯を手にする二人は、恐らく職人で金毘羅様に願掛けの寒中修行者であろう。下の屋台は、焼き玉、蒲鉾、椎茸などを大平おおひらに乗せて出す、「太平しっぽく料

理」。担いで坂を上がる二八蕎麦。家来を連れた侍も見える。坂上の大木の左は、辻番所。右側に見える堰は、溜池から外堀に落とされる余水の光景（外堀通り、特許庁前）。「どんどん」と水が落ちる音がしたという。そこで処の人は、「赤坂のどんどん」と呼んでいた。この堰の上、暗闇の中に灯りがともる屋敷が宮崎日向延岡藩、内藤能登守上屋敷。明治になって、この葵坂は削られ、溜池を埋める土砂と化した。江戸から東京へ、この界限で風景が最も変貌したところである。

溜池の南一帯は、馬場あり、大的稽古場ありの埋め立て地（堰堤）であったが、土手補強の目的で桐が植えられ、江戸の人々は「赤坂桐畑」と呼んでいた。広重はこの絶景が気に入ったと見えて、赤坂から桐の木を通して溜池の青を描いている。溜池は蓮の名所でもあり、二代將軍秀忠が琵琶湖や淀川の鮒や鯉を放し、このことでも有名になった。

天下祭り

溜池の南側、堰堤沿いに赤坂方面に歩く。左側の福岡藩松平美濃守（黒田）屋敷塀に沿って行くと、赤坂田町五丁目に出る。江戸初期溜池が整備される前、湿地帯であった処を埋め立ててできた町で、順に一丁目まで続く。ここまで来ると、溜池はぐっと細くなり、対岸の小高い山王台地（星ヶ岡という）にある日吉山王大権現社（日枝神社）の偉容が拝見できる。山王権現は、江戸城の鎮守社で、將軍家の産土神として、当初は江

◆広重絵 葵坂夜景



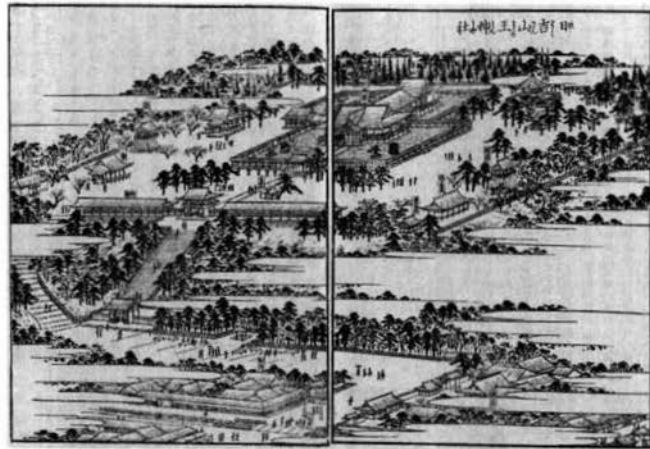
◆広重絵 溜池桐畑



戸城内紅葉山もみじやまにあった。二代秀忠は、これを半蔵門外に移し、一般にも開放し、四代家綱は当地星ヶ岡に遷宮したのである。社殿は太田道灌、家康以来、造営を重ねている。將軍はもとより、大名も頻繁に参詣したが、江戸庶民にとっても重要で、江戸城を中心に東西、日本橋川、麹町から南に住むもの全てが、当社の氏子であった。山王権現の伽藍配置は、ほぼ東西に向いている。そして溜池沿いにぐるりと子院が開んでいる。通常、権現に参詣するルートは、東側門前から、外堀内の大名屋敷通りを抜ける。西に直進すると、鳥居があり、左側に別当観理院がある。鳥居を潜って突き当たりを左に曲がると、右側に石段があり、登るとそのまま、西に向かって拝殿が展開する。この光景は、長谷川雪旦の「江戸名所図会」に正確に描かれている。絵にはないが、左側に溜池がある。参詣者にとっては、山王台地から眼下に見下ろす溜池の景観はいかばかりであったか。

さて、山王祭である。京都葵祭り、大阪天神祭りと並ぶ日本三大祭りにして、神田祭と並ぶ江戸三大祭り。規模の大きさもさることながら、その特質は武士と江戸庶民が一体となつて行われた祭りにある。氏子は徳川家をはじめとし、日本橋、京橋、芝、麹町など百六十ヶ町。六月十五日の大祭には、氏子町内から四十五基の山車だしが出る。それも半端ではなく、各町競い合つて豪華な山車を作る。長蛇の列。年番に当たった町では、道を整備し、高張り提灯を並べ

◆江戸名所図会 日吉山王神社



立てるなど莫大な出費。ある時の、日本橋一、二丁目の町内負担額は八千八百両に及んだという。幕府から百両の補助金が出たが焼け石に水。しかし、大名、旗本も槍、足軽などを出して警護や交通整理に協力した。山車や神輿は半蔵門から城内に入り、吹上御殿で將軍の御覽に供される。これは三代家光からの風習といわれ、山王祭が「天下祭り」と呼ばれた由縁である。

山車は、夜明けと共に山下御門に集結する（銀座泰明小学校付近）。堀を渡って、大名屋敷が立ち並ぶ道を縫って山王権現に到達する。ここで三基の神輿が加わり、麹町一丁目から半蔵門を通過して城内に入る。吹上御殿で將軍の御覽に供した後、城内を練り歩き、北の常盤橋御門から出る。

江戸名所図会には、湊橋、靈岸橋、茅場町辺りを練り歩く長蛇の列を克明に描いている。武士達も警護の役割を兼ねて大勢参加している。壮観である。茅場町には山王旅所

（山王権現の支社）があり、氏子町の北の拠点となっていた。

赤坂御門から

紀尾井坂

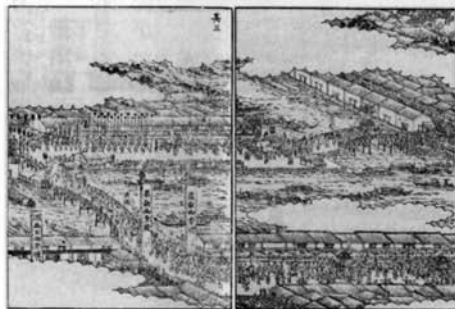
溜池堀を右手に見て、さらに歩く。池

畔の桐畑を縫って青い池水。道の左側、赤坂田町一丁目の町並みが終わると広小路に出る（赤坂見附）。前方は小高い丘の森。紀伊、井伊、尾張の屋敷である。堀を割って道は右に折れ、登る。すると赤坂御門（国道246）。石垣が正方形に配置された「枡型門」で、正面が高麗門。いったん枡の中に入り、右側の門

◆広重絵 猿（山王権現の神の使い）の山車が半蔵御門内に入ろうとしている図。



◆江戸名所図会 湊橋、靈岸橋の行列



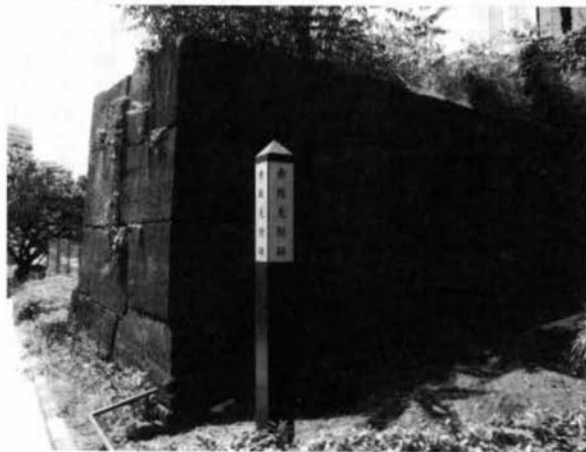
から出る。現在では高麗門左側の石垣のみが残されている。赤坂御門前広場は、大山詣での起点になっていたという。人々はここに集まって、大山に向かったであろう。江戸時代、大山詣では非常に盛んであった。御門に向かつて右手一帯は、松江藩松平出羽守の上屋敷（衆参両院議長公邸）。さらに隣接して、三河刈谷藩、土井大隅守上屋敷（メキシコ大使館）が山王権現の方に続く。この辺りは、有力大名の上屋敷が目白押しに存在する。

赤坂御門の左手一帯が徳川紀伊上屋敷（約二万五千坪）。御門に入ってぐると左へ曲がり、屋敷の南を堀沿いに歩く。この道は、紀伊と井伊の屋敷を分けるように北に登る、清水坂。江戸時代には弁慶橋はない。紀伊上屋敷は北に広大に伸びている。邸内には、道に面して湧き池が方々にあり、清水谷と呼ばれ、現在の清水谷公園にわずかにその痕跡を見ることが出来る。この辺りで明治十一年五月十四日、大久保利通は刺殺された。その様

子を勝海舟の三男梅太郎と国際結婚した、クララ・ホイットニーは、『クララの明治日記』に生々しく記している。「十四日の朝に恐ろしい暗殺事件があった。警察や護衛が現場に到着したときにはすでに大久保氏の頭は二つに割られ、胸に

は刀が柄まで突き刺さり、両手は切り落とされ、そのほか体中傷だらけであった。暗殺者達は直ちに官邸に赴き守衛に自首した」。紀尾井坂事件である。この様子が真実であるかどうか分からぬが、当時そのように伝聞されたのであろう。事件は、

◆赤坂御門石垣



大久保の盟友、西郷が薩摩城山で自刃して果てた、僅か八ヶ月後のことであつた。この朝、大久保は「ようやく戦乱も収まって平和になつた。よつて維新の精神を貫徹することにするがそれには三十年の時期が要る。明治十年までの第一期は戦乱が多く創業の時期、これから二十年までの第二期は内治を整え、民産を起す時期で、私はこの時まで内務の職に尽くしたい。第三期は後進に譲り、発展を待つ」と福島県令に語つたという。大久保は僅か十年で廃藩置県を初め、殖産の道を切り開き、近代国家への道筋をつけた。しかし、そのラディカルなやり方は、多くの者の反発を招いた。廃藩置県により、職を失つた不平士族の反乱が方々で起き、それを鎮圧した。大久保として例外ではない。彼を襲つた、旧加賀藩の士族、島田一良も西郷の影響を受け、恨み骨髓に徹していた。西郷を死地に追いやつた人間として鹿児島では永らく同郷の大久保に冷淡であつた。しかし、大久保は政治的信

念の人で、諸外国に伍して行く日本の姿を第一義とした人でもある。そのために内政の充実に意を用いた。冷淡、怜悯は彼のイメージにつきまといてゐるが、今もつて論議を呼ぶところである。しかし、何にしても大久保暗殺は、日本の損失以外の何ものでもなかつた。彼は、薩長藩閥的な考えで人を見ていない。その証が佐賀藩出身の大隈重信を重用したことである。大久保は私財をなすことをせず、死後は八千円もの借金が残つたという。また、西郷死亡の知らせを聞くと号泣し、時々鴨居に頭をぶつけながらも家の中をぐるぐる歩き回つてゐたという。清水谷公園には、大久保を偲んで建てた、大きな追悼碑がある。

この道の左側一帯が彦根藩、井伊三十五万石の中屋敷である（ホテルニューオータニ）。ゆるやかな坂を登ると紀尾井坂（紀伊、尾張、井伊屋敷に挟まれた坂）に出る。左に曲がつてこの坂を登る。坂の右側は四谷御門まで徳川尾張六十二万石の屋敷（上智大学）。坂は

頂点に達すると下り始める。堀を割って下る道に喰違見附があった。すると、正面が再び広大な徳川紀伊屋敷の長い壁（東宮御所、宮様邸宅、迎賓館）。少し右手に江戸を彷彿とさせる東門がある。これを堀に沿って左に赤坂見附の方に下る坂が紀伊国坂である。

江戸時代は、夜ともなれば、とてつもなく寂しい坂道であった。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の怪談『むじな』の舞台でもある。「赤坂に紀伊国坂という坂がある。日が暮れると誰も通る者のない寂しい道であった」という描写で始まる。ある夜、一人の商人が通りかかると、堀端に佇み、激しく泣いている若い女がいる。身投げを心配して彼は声をかける。「お女中、お女中、私でできることなら何でも協力する」。彼はかんで泣きじゃくる女性の肩にそっと手を置き、語りかけた。ややあって、その女性はすっと立ち上がると、そろりと彼の方に向き直った。そして袖で隠した顔を撫でると、目も鼻も口も

ない、のっぺらぼうであった。きゃつと叫んで彼は夢中で走った。すると漆黒の闇の中に小さな提灯の灯りが見えた。蕎麦屋の屋台だった。誰でも良かった。事情を説明するにも「あー」と言葉にならない。すると、「どうしたんですかい」と蕎麦屋。ことの次第をようやく告げると、蕎麦屋は「こんな顔でしたかい」と振り向いて顔をつるりと撫でた。その顔は卵のように、のっぺらぼうになり、灯りも消えた。

【参考文献】

広重の大江戸名所百景散歩 人文社

江戸名所図会 角川書店

クララの明治日記 中公文庫

怪談 ラフカディオ・ハーン作 三修社

江戸明治東京重ね地図 中川恵司編（株）エ

ービーピーカンパニー

響流十方

大哉解脱服
無相福田衣
被奉如戒行
広度諸衆生

大いなるかな解脱の服
無相の福田衣を
戒行の如くに被奉し
広くもろもろの衆生を度せん

己という田を

〔袈裟被着偈〕『法苑珠林』、『毗尼討要』など

仕事で東海道新幹線を利用することが多い。季節によりさまざまな表情を見せてくれる沿線の風景を楽しめるのはなんともありがたい。時速三百キロで疾走する「のぞみ」の車窓は、さながら、次から次へと違ったシーンを映し出すスクリーンといったところだ。

つい先日京都に向かった際も、山頂付近の残雪の白と中腹から下の青とのコントラストが見事な富士山、もう初夏を思わせるようにまぶしく輝く駿河の海、そして陽の光にきらめく田植えが終わったばかりの水田など、生命躍動の春を十分に堪能させてもらった。

ふと感じた。その広々と続く水田の表情が、どことなく曇っているような気がする。太陽に向かって背伸びしている若い苗は、たしかに美しいのだが……。

ぽつぽつと、なにか違うものが入る。腰ほどの高さの草がゆさゆさと波のように揺れている一角がある。麦畑だ。転作されたのだろう。こちらには水の張られていない田が一枚、あちらには田起こしもされていない田が二枚、といった具合だ。雑草が伸び放題となり、荒地と化してしまったところさえある。

そうか、水田でなくなっただけで水田だったのだ。

首都圏とはいえ、郊外にある自坊、檀信徒には農業を営んでいる家が少なく

ない。法事の席などでは、国の米の買い取り価格が低いことや、農業機器や燃量の高騰といったことへの不満がよく出る。ダブつくコメの生産調整のために国が奨励する転作に従った、といった話も聞く。自坊周辺にも、畑に転用されたり、休耕田のまま放置されている田はたしかに目立ってきている。それらは、稲作農家の悲嘆を彼らに代わって無言で訴えてくれているかのようだ。日本全国、どこもこんな調子なのだろうか。

わが国は世界有数の豊かな国だそう。

なるほど、どこの店にも家庭にもモノは溢れてはいるが、少なくとも食糧自給率わずか四〇パーセント足らずでは、豊かな国なんです、などと決して自慢できたものではない。豊かということの真の意味を、慎重に吟味する必要がある。貿易という他国との付き合いなど難しい問題はあるにせよ、コメの復権、いや、コメのみではない、農林水産全般についてもっと真剣に考えなくては、世界有数の貧しい国にいつ転じてもしない。

田は豊かな実りをもたらしてくれる。われわれはその恩恵にあずかることができる。しかしそれは、農家の人々が精魂込めて耕し、苗を植え、八十八ともいわれる多くの手間をかけてくれるからにほかならない。

仏教にも福田という言葉がある。善行の種を蒔くことにより功德という言葉を得ることができ、との意味だ。他者をいたわる行為、社会福祉などの事業推進の仏教的な論拠ともなり得た。奈良時代、病者や困窮者を救済するために設けられた悲田院ひでんいんなどは、まさにこれを背景とする。

僧侶が身に着ける袈裟は一名を福田衣ふくでんいという。布を縫い合わせた形状が田に似ていることももちろんあるが、自ら策励し修行することで、覚りというこの上ない収穫が得られるようにとの願いが込められてもいよう。

遅ればせながら：己という田を振り返ってみることにする。

善行、修行という苗は、一面に元氣よく育っていますとは、恥ずかしながら申し上げられない。雑草が生い茂ってしまっているところが多く見える。枯れ草が燃えているところもある。尽きない欲や瞋いかりの炎が引火したか。

わが国の水田事情を心配するよりも、まずは己という田を耕すことに精を出すべきことが先決と指摘されては、何も言えない。

(小村 正孝)

法然上人
とその
時代

シリーズ第四章

壇ノ浦へ

第八回

作

石丸晶子

画
アーサ



二十二

一の谷から約半年間、源平に見るべき合戦はなかった。平家は敗戦からの建て直しに忙しく、源氏もまた、兵糧と船の調達が困難だったのである。一の谷後、源氏では範頼らの主力部隊が鎌倉に引き上げ、義経は都にとどまって警護や行政に当たっていた。

この頃、後白河はようやく義経の存在に注目しはじめていた。

源氏と平氏、義仲と頼朝というように、有力武將を互いに対立させてみずからは漁夫の利を得ることが法皇の常套手段であったが、義仲が減じた今、武略に長け、都の礼儀もわきまえた義経が、後白河の前に急に大きく浮かび上がってきたのである。

そこで七月、法皇は義経を従五位下檢非違使・左衛門少尉に任じ、院御所の昇殿を義経に許した。だが、鎌倉で独裁者の地位を固め

つつあった頼朝は、このことを知って激怒した。彼はかねて朝廷に

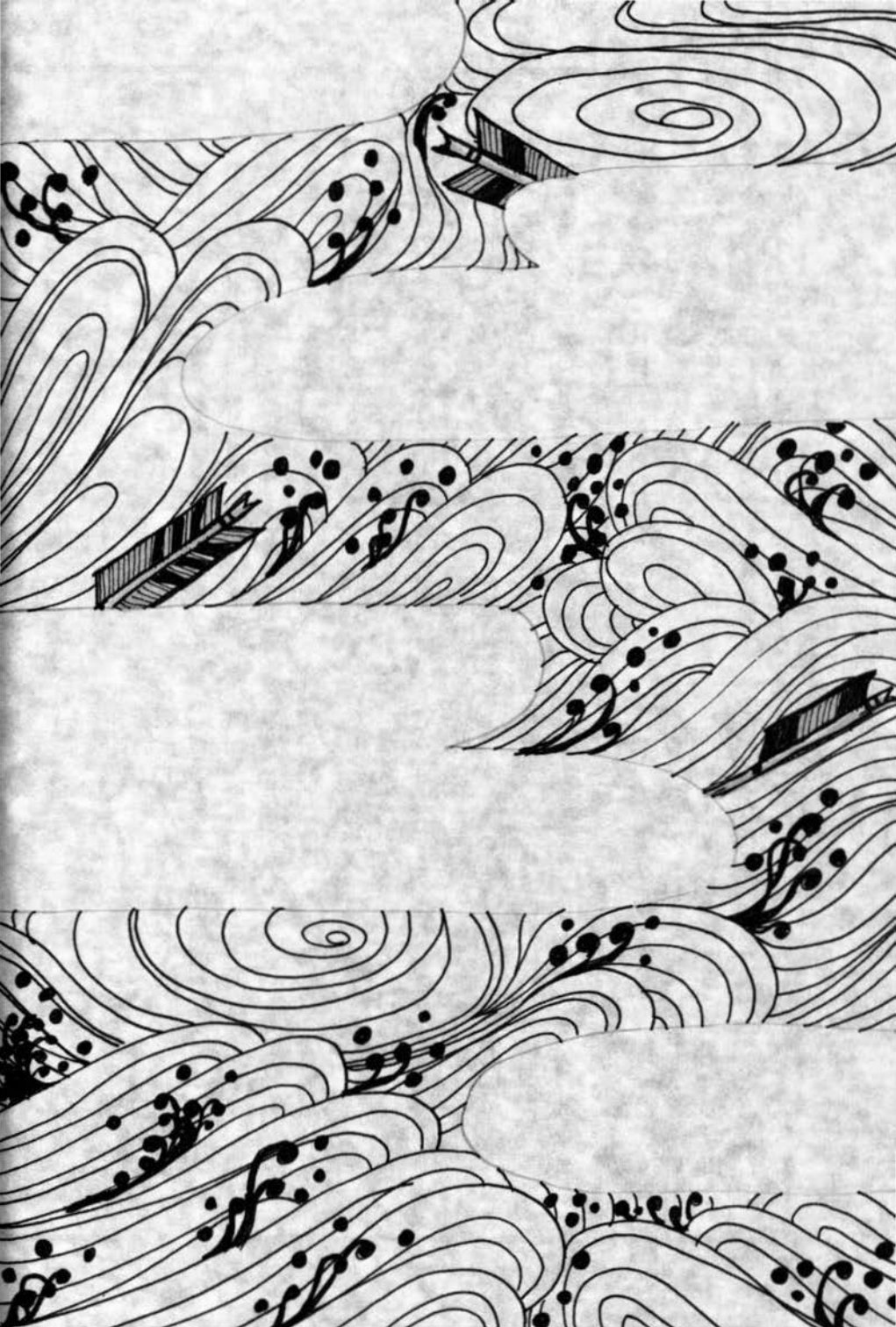
「御家人の勲功は京都の朝廷の議によらず、頼朝の申請に従って行つてほしい」と申し入れていたのである。ところが義経の

任官は、この申し入れを無視して鎌倉の許可なしに行われたのであった。

こうして頼朝と義経とのぎくしゃくした状況の中、平家追討が再開されたのは、義経任官から二ヶ月経った九月である。

このとき大將軍に任命されたのは範頼で、彼は大軍を率いて鎌倉から京都に向かい、さらに山陽道を西下していったが、義経が平家追討に向かうことを頼朝は許さなかった。義経はそのまま都に留め置かれていた。

しかし西下した範頼軍には苦戦が続いていた。やつとのことで範頼らは長門にたどり着き、九州を攻略しようとするところまでは行ったが、西国一円の豪族も水軍もおもつて



平家の支配下にあり、いくら範頼軍が陸から攻略をしかけても、西国での平家の海上権は揺るがなかった。

こうして膠着した状況のなか、範頼率いる源氏は、船の調達の見込みがつかない上に、兵糧米も不足し始めたのである。兵士の不平と望郷の念は募るばかり。士気の衰えは著しく、脱走帰郷する兵士も後を絶たぬ有様になってしまった。

はかばかしくない戦局に業を煮やした頼朝は、遂に義経を起用せざるを得なくなったのである。

そこで翌元暦二年正月、後白河と頼朝から義経に平家追討の厳命が下った。範頼が取ったような周辺の国々から平家を包囲攻略していくのではなく、今回義経は、平家の本拠地を一挙に直撃せよ、という命令であった。

義経は奮い立った。

「平家は前世からの因縁尽きて神仏にも見放

され申した。院にも捨てられ、波の上をただよう落人^{おちうど}となつてゐる。しかるを都落ち以来の足かけ三年、今なお攻め落とされずに西国^{さいごく}はじめ多くの国々を領有しておるのこそ、奇怪^{かいせう}千万。口惜しくてならぬ。このたび義経においては鬼界^{きかい}、高麗^{こうらい}、天竺^{てんじく}、震旦^{しんたん}までも、平家のあらんかぎり、地の果て海の果てまでも身命を賭して攻め落とさずには止まぬ」

義経はそう言い放つと周囲の武者どもをキツとにらみ、

「命を惜しみ、妻子をいとおしむ者どもは、これより鎌倉へ帰るがよい。かかる者どもは義経には不要である」と檄を飛ばした。

二十三

二月十四日、荒れ狂う天候について義経は、二百余艘の船に四千に余る兵を乗せ、彼らを淀川の河口一帯に集結させた。ところが暴風

雨は激しさを増すばかり。付近の木立はなぎ倒され、海は荒れに荒れて停泊させている大船何艘もが叩き破られる凄まじさである。止むなく、破船した船を修理して嵐の静まるのを待つこと数日、しかし嵐の静まる気配はなく、ますます風波ともに激しきは募った。かかる天候をみて怖気づいたのは軍奉行として鎌倉から義経軍に送り込まれた梶原景時はじめ將兵たちである。彼らは嵐が静まるまで船を出すのは見合わせたいと口々に言い張った。

しかし義経は譲らなかつた。

かかる嵐を突いて出撃するのこそ、油断した敵を討つ天からの好機ではないか。

「船を出だせ」

と彼は命じた。

「たとえこの河口は嵐が収まりだしているように見えましても、沖は波風ともに大時化でございます。船を出すなどもつての外。多少

なりともおおよそ海を知る者のなすことではありませぬ」

義経の命令に梶取りたちは口を揃えて反対した。

しかし義経は、

「勅宣を拝し、鎌倉殿のご代官として平家追討に向かう義経の下知に、背く汝らは朝敵である」

と大声で怒鳴りつけ、梶取りたちを睨みつけると、武藏坊弁慶と奥州以来の側近佐藤兄弟に向かつて命じた。「野山の末、海川で死すとも、みな前世の因縁である。出航せぬという者どもは朝敵なれば、みなみな即刻射殺せ」命令をうけた佐藤兄弟と弁慶らは矢をつがえ、出航拒否の梶取りたちに向かつて今にも放つ気配をみせた。

そこでしぶしぶ。

「矢に当たって死ぬのも、海にて死ぬのも同じこと。ええい、ならば海に出て死んでやろ

う」

といって、義経の命令に応じたのが五艘の船の梶取りである。

残りの船の梶取りたちは、脅されてもなお、大時化の海に恐れて動かなかった。

十六日丑の刻（午前二時頃）、義経を大將に、百人ほどの侍と馬を乗せた五艘の船は、荒れ狂う風雨を突いて淀川の河口、渡辺の津を出て行った。

あたりはまだ真闇である。

しかし船は、櫓を漕いでは三日かかるところを烈風に押され、わずか四時間ほどで四国阿波勝浦（徳島市南部）に吹き寄せられた。

朝になっていた。

海辺から渚の方を見やると、平家の赤旗を差し上げて五十騎ほどの武者が海の方をみつめていた。そこで船から馬を降ろした源氏の侍たちはさっと馬に飛び乗るや、その五十騎ほどの平家武者たちを血祭りにあげ、あとは

そここにうち群れている平家の武者たちを蹴散らし蹴散らしして屋島に至った。

二十四

視界が春霞に霞む二月十八日、屋島では平家の宗主宗盛が、その屋形で討ち取られた源氏方の首実検をしていた。

四国周辺では、かねて阿波の豪族民部重能が平家方に付いていたが、伊予の豪族河野四郎通信は終始源氏方として活動し、そのため、四国のそここでは民部方と河野方が競り合っていた。宗盛はこの競り合いで討たれた河野方家の子郎党の首の検分をしていたのである。

とそこへ、

「陸から敵が攻め寄せましたぞ。源氏の白旗が陸から押し寄せて見えます。大軍とお見うけ申す」

と騒ぎ喚く侍たちの声が屋形の外から聞えて

きた。渡辺の津を出航した義経主従百人ほどの源氏を、大軍と見誤ったのであった。

ハッとして宗盛は顔色を変えた。

義経に平家討伐の院宣が下り、源氏は二百余艘の船を淀川河口に集結させている知らせは伝わっていたが、折からの悪天候である。それに船を仕立てたとあれば、今回は海での合戦であろう。海戦ならばすでに平家は小船、小船数千艘、屋島の浜をはじめその周辺に手配してあった。

「源氏に船戦の経験はありません。船を操る知識も無ければ、西国の水軍とのかかわりもなく、船の調達もできません。われらの戦略は、この源氏を船戦に追い込むことです。ごさいます」

と総大将の知盛はじめ頼みとする武将誰もが、そう宗盛に進言していた。「源氏はいよいよ船戦に出発します。淀の河口に二百艘を集めました。われらの思うところで

ございます。平家は千はおろか二千にもおよぶ船を持っておりますれば、二百の船などもの数ではありませぬ。勝利は必定。お案じなさることはいささかありませぬ」

「——次の戦は船戦になると皆が申しておつたのに、一体どうなっているのか。なぜ、義経は船ではなく、後ろの陸から攻めて来たのであろう」

そう思いながら立ったり座ったり、屋形の中で落ち着きなくうろたえているところに、平家の侍たちが土足のままドツと屋形に押し寄せ、口々に叫んだ。

「渚に上げ置きました船ども、急ぎ海に降ろしました。帝、女院、二位殿、みな様すでに御船にお乗りでございます。内大臣様も急ぎ御船にお移りくださいませ」

宗盛は慌てた。慌てふためいて討ち取られた敵の首が載っている盆を蹴飛ばすや、侍たちに背中を押されるようにして屋形を飛び出

し、よろけながら渚に浮かぶ船に飛び乗った。
どの船もどの船も、数千におよぶ平家の船
の中はどれもみな寿司詰めであった。

帝、建礼門院、二位の尼時子以下女房たち。
またこの時、大將軍知盛は別軍を率い、壇ノ
浦赤間が関近くの引島に砦を築く工事の指揮
に当たっていて屋島にはいなかったが、宗主
の宗盛以下、平家方將兵たちはみながみなこ
のとき船に逃げ込んだのである。

彼ら平家の人びとは、こうして屋島を追わ
れ、帰る陸地を失って、以後、海に漂う身と
なった。

屋島から海上へ平家を追い払うや、義経は
安徳天皇の御座所であった仮内裏をはじめ屋
島に造営されていた平家の屋形すべてを焼き
払った。

壇ノ浦はすぐそこに迫っていた。

(つづく)

古き伝統技
三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1289
振替00180-2145231

法然上人鑽仰会

講演会^の御案内

●日時 6月25日(水) 午後3:00より

講師

梶村 昇

演題 **現代の信仰のかたち**
法然上人の視線でみる“今”

主な著書

森と水と大地『アジアの自然を考える』(アジア研究所叢書)

アジア人のみた靈魂の行方(大東出版社)

悪人正機説(大東名著選)

日本人の信仰『民族の〈三つ子の魂〉』(中公新書)

法然のことば(雄山閣)

南無阿弥陀仏の論理(毎日新聞社)

法然(角川書店)

法然上人行実(浄土宗出版室)

●会費/会員無料、一般1000円(申し込み不要)

●場所 **増上寺 慈雲閣** 都営地下鉄三田線「芝公園駅」徒歩3分
都営地下鉄浅草線・大江戸線「大門駅」徒歩7分
JR山手線・京浜東北線「浜松町駅」徒歩10分

●問合せ **法然上人鑽仰会**

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話: 03(3578)6947

FAX: 03(3578)7036



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●上

〔特選〕
上げ潮に磯慌し浅蜷掘り

井村 善也

遠浅の浜だと引くのも速く、遠くまで出て
行けるが上げ潮も速く、うっかりしていると
知らぬうちに足元まで満ちてくる。浅蜷はま
だ掘っていたいし早く退かねばならぬし、誰
もかもあわただしいことである。

〔佳作〕葉の上に黄金こぼしつ棕櫚咲けり

金谷 友江

春風に押されて上る神楽坂

本郷 桃児

花の蕊掃くと羽織りし上っ張り

佐藤 謙郎

●野

〔特選〕
野遊びやむすび三つの竹の皮

中村 真一

家族でか友人とか、あるいは俳句仲間とし
てもよからうし、一人でもよい。眺めのよい
場所を見つけて腰を下ろす。弁当を開くとむ

すびが三つ。竹の皮とあるから家で作ってくれたものだろう。

〈佳作〉

野菜餃子山ほどつくり夏はじめ

中島富士子

上野山不眠不休の桜かな

柏木 貞華

落花受け野辺の送りのしずしずと

石原 新

●自由題

〈特選〉

降る桜引つ越しの日のだんボール

井草 芳郎

引つ越しの荷、つまりだんボールの荷を積み上げているのか、運んでいるところか、あるいは荷を詰める箱を集めているのか、それらは読者に任されているのである。桜はしきりに降りかかっている。

〈佳作〉

巻き鮭の切り目の乾く桜かな

狭山 棹

片言の日本語まじり花の宴

山口 信子

瀬の波のどんと底打つ雪見舟

村上 青女

読者の声

昨年、菩提寺のお十夜法要にはじめて参加しました。御法話のお坊さんが、法然上人の「どんな人間でも平等に往生することができるといふお言葉を引き、お話されていたことが心に深く残りました。昨今、僕のような世代の若い人間が凶悪な罪を犯すことが多い。そうした罪人を罰するのに極刑を望む声が多くなっています。被害者の遺族の心情や、抑止力のことを考えると無理もないように思えます。私も極刑やむをえないと思います。でも、このことを自分なりに考えてみたのですが、極刑＝死刑という考えは変ではないか、と思えてならないのです。浄土宗の教えでは「どのような罪人でも安楽国に往生できる」

浄土誌上旬会のお知らせ

締切・二〇〇八年六月二十日
発表・『浄土』二〇〇八年十月号

選者・増田河郎子（『南風』主筆）
応募方法

兼題

（季語ではありません）

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上旬会係

三島自由題

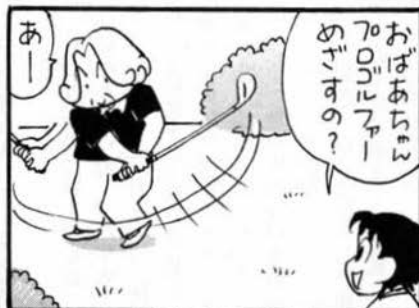
のですから、つまり死刑は罰にはならないのではないのでしょうか。むしろ救いになるのではないのでしょうか。人間は遅かれ早かれ必ず死を迎え、浄土に旅立つのですから、死を与えることは罰を与えることにならない。むしろ穢土に生きる普通の人間の生涯にとつてありえないのは長く牢獄につながれることではないのでしょうか。それが極刑ではないのでしょうか。死刑は決して極刑に値しないように思えます。また別のほうから考えると死刑を執行することもまた明らかに殺人にほかならないので、検事、判事、法務大臣、刑務官などの特に直接の関係者などは罪を犯すことになってしまいます。間接的には私たち日本人全員も罪を負います。死刑を行うことは、もつと罪を増やすことになってしまいます。凶悪な犯罪は決して許してはなりません。だからこそ本当の刑罰を与えるべきだと思ふのです。いろいろ考えても、死刑制度はいかにも野蛮で未開な制度のような気がします。仏教国日本、特に法然上人のお浄土の御教えを享けた私たち、法と文明、文化の水準の高い私たちは、もつと優れた制度を考え出すことができるのではないのでしょうか。そのような方向での論考など期待しております。

（山口県 高校生）

さっちゃんねネ

51 かい日

かまちのしろ



梅雨空に二頭の獅子が啼いている 岱潤

北京オリンピックもあと数十日と近づいてきた。世界中を駆けめぐった聖火リレーは、チベット族の人々の力を大いに借りてチヨモランマの頂上まで登り詰めた。頂上からの喜びの声は中国語とチベット語が交互に飛び出る楽しいものだった。この聖火リレーで世界中の注目を浴びたのが、むしろチベット問題だった。

このチベット問題、自分とは少し距離のある問題とのんきに構えていた私に、身近な女性にこの間長野に行つて来たと言われてびっくりしてしまった。「何しに」の問いに、もちろん「フリーチベッ

トですよ」と言う。彼女が言うには「世界の世論として、日本人には人権意識がないから妨害行動は何も起きないといううわさがあつた。これではいけないと思う、私一人でも旗を振ろうと思つたら、そういう人が大勢いて、それで当初来日の予定もなかった、国境なき記者団のリーダーも来てくれて、それなりにニュースになったから良かったと思う」と言っていた。

世界中で人権問題として大問題になっているチベット問題も、日本のマスコミは具体的には何も伝えてはくれない。インターネットのみがその情報源だ。私自身は今、明治当初の北海道に思いを馳せ

ながら、アイヌ民族とチベット民族を重ねて、民族問題を考えてゆきたいと思っている。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十四巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十年 五月二十日

発行 平成二十年 六月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七
FAX 〇三(三)五七八七〇三六
振替 〇〇二八〇・八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

譬ひ如によ大だい海かい

たとえば大海の如し
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

海は、人に活力と万象の支えを教えてくれる。

人間は小さな存在。宗教は人間に命の輝きを補給してくれます。

人間が宗教を求めるのは、二つの理由からです。一つは人間の弱さの故に――自立できない、能力がない、左右されやすい、生老病死の不安。惨めな自己を捨て強さを求めて宗教に向かいます。

もう一つは、自己喪失に繋がる運命の絆を感じ

たとき――流動的社会、管理社会、核家族、危機的環境。仕切られた社会・環境を抜け出し、温かさを求めて宗教に向かいます。

宗教は「海」です。海が全ての命の源のように、宗教は弱い人間を支え強くし、心を温めてくれる世界です。

悲しき時は、海を見よ。

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう

600円(税別)

『差出人は法然さん』

600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版

1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)

『選擇集絵解き物語』含む

20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」

(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠一巻本」より